
レモンの砂糖づけ

麦子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レモンの砂糖づけ

【Nコード】

N3237P

【作者名】

麦子

【あらすじ】

マイペースで恋愛経験のない女の子と、そんな女の子にすっかり恋に落ちた人気者の男の子。じれったいふたりの恋のお話。

「砂糖づけの指先」のふたりが付き合う前のお話。

1 おおかみのえくぼ

友達の間で風邪が大流行している6月。

天才でも馬鹿でもない中途半端な脳みそのわたしは風邪というものに患ったことがない。ついでに言うとな恋の病というものにも患ったことがない。恋とか愛とか惚れた腫れたという感情がよくわからないまま大学生になってしまったわたしを周りの友達はどう言いますのろま屋、と。

「隣、座ってもいい？」

ただどわたしも一応はお年頃の女の子なわけで、大学内でもつかっこいいと評判のある男の子に不意打ちで肩をとんとたたかれて話し掛けられたものなら、普段はおだやかな心臓もまんがみに飛び出そうになるくらい驚いてしまうのです。

「……！！？」

「おわ、……つと、」

「あ……」

「あっちゃー」

慌てすぎた肘がふで箱にクリーンヒット。

わたしがぼけーつと傍観している間に男の子特有のおおきな手がバラバラと床に散らばったシャーペンたちをひよいひよいと拾い上げてくれていた。足元でふわふわと揺れる茶色の髪の毛を、ただただ

見つめるだけのわたし。

ハッ和我に返ってワテンポ遅れて椅子から立ち上がるうとしたら「ん」と手渡されて、中腰のまま「ありがとう」と受け取るまぬけなわたし。

訪れた沈黙のあと、遠慮がちに顔をそつと覗かれる。

「えーと、隣、いい？大丈夫？」

「…え！…はっ！」

「あ、やつぱだめか。友達とか座るよな？」

「う、ううん！座らない…です！」

「え？そうなの？」

「は、はい。なので、わたしなんかの隣で良かったらどうぞ遠慮なくお座りください」

「まじで！やった！」

ばあつと顔をきらきらさせてガッツポーズするのは、「大学の女の子100人に聞きました！抱かれない男の子」（ともだち調べ）ナンバーワンの坂田くん。

嬉々とした表情を浮かべながら鞆をがさごと漁っている彼はきつと気付いていない。女の子たちの熱い視線。プラスわたしの視線。はじめてこんなに近くで坂田くんの顔を見た。多分もうこんな機会はないだろうから目に根性焼きする覚悟で坂田くんの整った横顔を見つめる。

「春野：さん？」坂田くんがわたしのノートに書かれたわたしの名前を読み上げた。

「はい！春野です！」

「あーそのー」

「？」

「友達は？今日来ねーの？」

「風邪です」

「風邪？」

「39度の高熱が出た…って、夜中にメールきてたんですよ」

ばかりと携帯を開けて友達から送られてきた文面から辛そうな雰囲気伝わってくるメールを坂田くんに見せると、苦笑いして頷かれた。…どんな顔をしてもらったのかいいひとっているんだなあ。変に納得。

「坂田くんは？」

「えっ？」

「坂田くんはお友達のところに行かなくてもいいんですか？」

「あー…えーっと…」

「？」

「実は…俺の友達もみんなそろって風邪でさー」

「そうなんですか！…やっぱり大学に風邪菌が潜んでいるということ…となんですかねえ…」

「…ってか、あのさ」

「はい？」

「俺の…そのー…名前、知ってたの？」

「はい。坂田くんは有名人ですから」

「有名人？」

「かつこよくて抱かれましたって！」

「ぶほっ、」

「みんな言ってますよ」

「げほっ…あー…そ、そうなんだ…」

お話をしながら思ったのは、朝ごはんのあんぱんはあとから食べようと決めたこと。いくら色気がないわたしでも男の子がいる前であんぱんに噛り付く度胸はありませんから。ちぎって食べるのは邪道。あんぱんは噛り付く食べ物だと思っています。

あんぱんについてひとり脳内で語っていたわたしの隣で、一度飲んでいたコーヒー牛乳を中断させた坂田くんが鞆から取り出したのはチーズバーガー。朝からボリュームがあるものを食べるなんて、女の子にはない思考回路である。がぶりと豪快にチーズバーガーに噛り付く坂田くんはまさに男の子。

おおきな二口目を食べたところで、坂田くんが動きをとめた。

「あ、ピクルス」

「苦手なんですか？」

「苦手…」

「わたし、食べましょうか？」

「へっ？」

「ピクルス、好きなんですよー」

「…いいの？」

「はい！」

「んじゃ、よろしくお願いします」

「いただきます」

ぱくり、と一口。なんだか楽しそうにモグモグと口を動かすわたしを見つめている坂田くんの視線に、急に恥ずかしくなった。口を両手でそっと隠す。

「おいしー？」

「んむ」

「にしても、やっぱり女の子って口ちっさいよなー」

「ほうへふか？」

「うん、すっげーかわいい」

「んぐっ」

ざわめく教室で囁かれた最強の殺し文句。そして、頬杖をついてへらっと笑った坂田くんは、わたしの齒形つきのチーズバーガーにまた豪快に噛り付いたのだった。

2・かわいいはがた

きみを見つけたのは、雨上がりの湿った匂いがする午後13時7分。行く手を阻む水たまりとぐしょ濡れになったスニーカーにイライラしながら大股で歩く途中、すれ違った女の子。音符の模様がはいったリュックを背負い、片手には教材がぎっしりと詰まった紙袋を提げて立ち止まっているその姿を横目で確認。気になって、両目で振り返って再確認。

見上げた先に映っていたのは、曇り空と青空の境目から見えるおおきな虹だった。何気なしに女の子を見ると、口をあんぐりとさせて見入っている。と思つたら、慌ただしくリュックの中身を漁りだした。とほぼ同時に、紙袋の底からずざざーっと教科書が雪崩落ちた。更に慌てるその仕草に思わず吹き出しそうになる。…なんかまんがみてえ。

「春野、何してんの？」

「け、携帯がない…！」

「……そのポケットからはみ出してるリボンのストラップはなにかしら？」

「え？……あ…！」

「（おまけにドジっ子）」

すっかり地面の水分でふやけてしまった教科書には目もくれず（代わりに友達が拾っている）、一生懸命に手を伸ばして写メを撮る爪先立ちの女の子。虹がうまく写ったのだろう、満足そうに笑っている。そのあと、友達に叱られながら教科書を拾い集めていく必死な

顔を見て自然と口元が緩んだ。

そんなきみに惹かれてうつかり好きになってしまったのは、虹が微笑んだ午後13時16分。

だから、2週間後の今日、偶然ひとりで座るあの子の後ろ姿を見つけたとき人目をはばからずガッツポーズをしました。野上からサボリのメールが届いたときには、すでに俺は彼女の隣の席をゲットして二回目のガッツポーズをしていたのだった。彼女は不思議そうに笑ってた。

「坂田くん」

「ん？」

「あんぱん、すき？」

白衣が似合わない教授のおっさんの話を聞き流していたら、隣から小声で話し掛けられて腕をつんつんとされた。動揺を必死に隠しながら笑顔を作る……ん？あんぱん？

「さっきのピクルスのお礼です」

「……」

「…あんぱん、きらい？」

「だっ、だいすき……。超だいすき、です！」

「わたしもすきー。おいしいよね、あんぱん」

春野さんの気の抜けたような満面の笑みが、どきゅんと俺の心臓に刺さった気がした。

「坂田くん？」

「あ、ありがたく頂戴します…」
「どうぞー」

あの子が食べたチーズバーガーを見て“間接キスだ”なんて小学生並みの思考回路の俺に、これ以上その純粋な笑顔を見せないでください。めちゃくちゃに食べてやりなくなっちゃうじゃないですか、もう。

そんな下心だらけの笑顔を見せる俺のことなんてまるで知らないきみはうれしそうにあんぱんを見せ付けてくるのだ。…負けます、ほんとに。

「あー…のさ、」

「はい？」

「いまさらだけど、敬語とか使わなくていいから。なんか緊張するし」

「は…、うん」

「あとさ」

「うん？」

「メ…メルアド…教えてくれない？」

「えっ」

「あー…だめ？」

「わ…わたしなんかのメルアドでいいの？」

「うん」

「せ、赤外線でもいいかな？」

「うん！！」

ちらりと見えた彼女の携帯の待ち受け画面。ぼやけて写っている七色に、また頬が緩んだ。

今日の戦利品…あんばん、メルアド、笑顔、それとチーズバーガーの小さな歯形。いつか彼女ごと自分のものにできたら。
なんて、ばかな妄想に耽る生温い午後のこと。

3・たべられない

今日のお昼ごはんメニュー…牛乳、あんぱん。

「…あんたはどこぞの張り込み中の刑事か」

訂正。今日のお昼ごはんメニュー…牛乳、たまごサンド。大好物のあんぱんは、ツツコミ上手なともだちの手でパンコーナーの棚に戻されました。

「春野さん？」

今日はあいにくの大雨でまだまだ梅雨明けの足音は聞こえてきそうにない。…お昼時の食堂でひととき目立つ集団、その中にいたキラメル色の髪の男の子と目が合った。坂田くんだ。赤色のボンボンで結んだ前髪をぴよこんと揺らして手を振ってくれる。慌ててぺこりと頭を下げたら、膝小僧に貼ってあった絆創膏が見えて少し恥ずかしくなった。

「春野さんも食堂で食べるの？」

「ううん。購買で買ってきたの」

「へー……って、昼飯それだけ？」

「うん」

「そんだけで足りるの？少食だなー」

実はさつき、ケーキバイキングに行ってきたからお腹いっぱいなんです…なんて、言えなくてとりあえず笑って誤魔化しておく。

「あ、もしかしてケーキ食ってきた？」

「えー！バレたー！」

「やつぱりー。春野さんから甘いにおいすんだもん」

「どんだけ嗅覚するどいんだよ、犬かお前は」

ケーキの甘いにおいを見事言い当てた坂田くんの周りにゾロゾロと男の子たちが集まってきた。ハツとなつて周りを見渡すと、甘くてあつーい女の子たちの視線がこちらに集中している。その視線を軽々と背中ではね返していく坂田くんたちに圧倒されるばかり。一歩二歩、距離を置いて坂田くんたちの会話を拾う。…あんなキラキラ空間に土足で入り込むわけにはいきませんから！

「黙れ早乙女。俺と春野さんのトークに割り込んでくんない」

「おーおー。餅を焼いちゃってる感じですか？意外と坂田はウブだねえ」

「野上、お前も黙れ。そして春野さんに近づくな」

「まあまあ、立ち話もアレですから座って仲良く密着して話をしましょうか」

「佐々木いいい！おめーはどさくさに紛れてなにやってんだ！春野さんの隣に座るのは俺だ！誰にも譲らねえ！」

その何とも言えない微笑ましい雰囲気思わずクスリと笑ってしまった。「ほら！笑われたじゃん！」坂田くんが動くたびにちょんま

げされた前髪もぴょんぴょん跳ねる。

「あ、日替わり食べてるんだ？」

「そうそう。今日はハンバーグだった！」

「おいしそうだねえ」

「一口食べる？」

「えっ」

よみがえるチーズバーガーの歯形。お箸で器用につままれたハンバーグのひとかけらに慌てて首を横に振った。そんなに物欲しそうな顔してたのだろうか！確かに色気より食い気を選ぶ女のかけらもないわたしですけれども！

小さく、「お腹いっぱいです」と断るのが精一杯だった。

「あれ、春野さん」

ハンバーグをぺろりと平らげた坂田くんが急にわたしをじっと見つめてくるから、慌てて口元を両手で押さえた。ケーキの食べかす、ついていませんように！

「足、どしたの？」

「あし？」

「こらっ！坂田、はしたないですよ！女子の生足を舐め回すように見るんじゃないですね！」

「お前にだけは言われたくねーよ！このむつつりが！」

「ああ、だから佐々木は髪切ってもすぐ伸びるんだ？納得ー」

「何言ってるんですか。俺より坂田の方が、前髪伸びるスピード早いですよ？」

「じゃあ、むつつりなのは坂田ってことで」

「賛成」

「なんでだよ！反対！断固反対！」

坂田くんが何を言おうとしているのかわからなくて、咄嗟に両手で膝を隠した。こんなよれよれのかっこ悪い絆創膏なんて誰も気にもとめないと思っていたのに。坂田くんはきっと他人の些細な変化にも気付くことができるひとなんだろう。

坂田くんたちの話題はいつの間にか目玉焼きには何をかけるのかというグルメな議題に切り替わっていた。少しまざりたいと思う、お腹はいつでも八分目を目指しているわたし。ちなみにわたしはしゅうゆ派です。

「んで春野さん、結局のところどうなの？」

てっきり忘れられていたと思っていたのにいきなり耳元で尋ねられて一瞬足が宙に浮いた。「気になる」とそのきれいな茶色の瞳が訴えてくるから、緊張しながらも坂田くんの耳元に顔を近付ける。

「た、たいしたことじゃ…ないんだけど…」

「うんうん」

「朝ね、ぶつかったの」

「え、なにと!？」

「しょ、小学生と…」

「へ？」

「わたしも携帯でメール打ちながら歩いてたのが悪かったんだけどね」

「それで転んだんだ？」

「お、お恥ずかしい限りです」

「怪我したの膝だけ？」

「あとは手のひらの皮がめくれたくらい」

「見せて」

「…！」

「うへー…痛そ…平気？」

「へ、平気」

単純に心配してわたしの手を触ってきただけの坂田くんの行動に、食堂が一気にざわめきたつ。主に、先ほどから視線をぎらつかせていた女の子たちが中心。坂田くん人気がこんなところで発揮されるとは！天気予報と同じくらいにコロコロ変わる複雑な乙女たちの思考なんてつゆ知らず、坂田くんはわたしの青紫になっている手のひらをそつと撫でた。

「痛い痛い痛い飛んでけー、なんてな！」

「あ、ありがとう…治った気がする」

「まじか。すげえな俺」

トゲトゲな視線をすべてやわらかいはなびらに変えてしまうような坂田くんのやさしい笑顔を知ったどしゃ降りのお昼時。

別れる間際に、「ちゃんと前見て歩かないとだめだよー」とお母さんみたいなことを言ってくれた坂田くんの忠告もむなしく、食堂の出口が雨でつるつるになっていたことに気付くのは屍餅をついたその後。

4・たべてみたい（前書き）

あいすべきばかり。

4・たべてみたい

身体より少しおおきめに見えるピンク色の水玉模様のリュックをだ
らんと背負って食堂の出口で尻餅をついている後ろ姿を見た。

「お前、あんなちんちくりんが好みなのか？」
「は？」

スカートが……！と騒いでいる春野さんの慌てた表情を遠目で見惚
れていた俺の肩に図々しく腕を乗せて、ちんちくりん発言をした失
礼極まりない早乙女を睨む。……そこがまたいいんだろうが。「だめ
だな、重症だ」と、早乙女がやれやれと憎たらしいため息をついた。

「つーか、あの子かなりのドジっ子属性だな？しかも今どき珍しい
計算じゃない天然の犯行と見た」

さっきまで大人しくオレンジジュースを飲んでいたはずの野上がつ
ぶやいた何気ない感想に、ぎくりとする。野上の、女みたいにでか
い目がうつすらと楽しげに細められた。視線の先には、未だ出口付
近でワタワタと慌てふためいている春野さんがいる。……嫌な予感し
かしないのはなぜだ。

「アレは磨けば輝くタイプだなー。……Sの血が騒ぎますねエ」

やはり。S心をくすぐってしまったようだ。今後、野上と春野さんを接触させないようにしようと思に刻み込む。かわいい仮面を被った腹黒に気をとられていたら、もうひとりの要注意人物である佐々木がキラリと眼鏡を光らせていた。

「へえ、坂田はドジっ子萌えだったんですか。初耳ですね」

「黙れむっつり眼鏡」

「むっつりな人にむっつり呼ばわりされる筋合いはありませんねえ」

「とにかく！春野さんを汚す発言は控えろ、俺が容赦しねーから！」

「でもちんちくりんのくせにけっこう胸でかかったな」

「てめーもだ早乙女！お前はいつまで中二脳なんだよ！」

「坂田は巨乳好きだったのですか。気が合いそうですね」

「こいつが巨乳好きなのは今更だろ」

「おい！さっきから外見ばっかじゃねえか！俺はそんな不純な動機で春野さんを好きになったわけじゃないんだよ！！」

「じゃあ、どんな動機があんだよ」

「……ぜってー言わねえ」

…一目惚れでした、なんてこいつらの前で言えるわけがない。爆笑されてからかわれるのが目に見えている。恋に悩んでいる幼気な俺に、じりじりと詰め寄ってくる暇人共は馬に蹴られてしまえばいいのと思う。

「で？メルアドとか知ってんのか」

「ああ、一応な」

「メールは？したの？」

「……してねえ」

「なんでだよ、しろよ」

「そうですよ。男がガンガン攻めないでどうするんですか、情けないですねえ」

「う、うつせー！俺の勝手だろ！ほっとけバカ！」

「ちっ、めんどくせえな。ケータイ貸せ、俺が打ってやる」

「はあっ！？ちょ、やめろって！」

『一発やらせろ』の文字を削除して、余計なメールを作成しやがった早乙女の顔面に熱々のおてふきを投げつける。こんな下心まる見えのメール送ったら、好感度だだ下がりどころか軽蔑されること請け合いだっつうの！俺は嫌われたいわけじゃねーんだ好かれたいんだ！

「なんだよ、俺はお前の心の声を言葉にしてやったただけだろうが」

「坂田：そんなヘタレじゃいつまでたっても足踏み状態ですよ」

「：佐々木のくせに正論言ってんじゃねえよ腹立つな」

「まさかてめえ、ガラにもなくビビってんのか？」

早乙女の鋭い指摘に肩がびくついた。ニヤリと笑う野上と佐々木。神様、こいつらの頭に何かとてつもなく硬くて重いものを落としてください。なむなむ。ナムナム。

「べ…つに、そんなんじゃねえよ！…ただ、いざメールしようと思ったら緊張しちまって指が動かなくなるだけだ」

「ビビってんじゃねえか」

「なんか…女子高生みたいだな？」

「あゝあああ！だからお前らにだけは言いたくなかったんだよ！

絶対笑うもん絶対余計なこと言うもん！」

「だっておもしれーじゃん」

「こっちは真剣なんだよ！あーもう！ほっといてくれ！」

「何言ってるの。こんな面白…げふんごふん、楽しそうなこと俺たちが見逃すわけないじゃん」

「野上クーン？言い直せてないんだけど。結局楽しんでるんじゃないか」

やっぱり言うんじゃないかと、頭を抱えて地団駄する。野上たちは俺を差し置いて、ノートに何かを書き出していた。何々……、
“恋のキューピッド大作戦”？こいつら、絶対邪魔する気満々だろ。そんなわけで、俺を無視して、急遽開かれた恋の作戦会議。一人目、早乙女の見解。知的に見られたいだて眼鏡野郎は、一丁目にご自慢のだて眼鏡をくいと指であげた。胡散臭さが否めない。

「坂田、まずはステップ1です。さりげなく彼女の前にハンカチを落として彼女がそれを拾うのを待つ…そして偶然を装って彼女の手を…」

「どこのひと昔のドラマだよ！そんなベタベタな展開あつてたまるか！」

却下。

月9ドラマ観て、出直してこい。ついでにその見せかけだけの眼鏡をナイル川に捨ててこい。いや、訂正。ゴミはきちんとゴミ箱に捨てなさい。以上。

二人目、野上の意見。巷ではハニーフェイスのおかげで“王子様”と呼ばれているが、実際はただのかわいいお顔をうまく使い分ける

魔性のドSである。につこりと笑いながらとんでもない暴言を吐くのが得意分野な男を見かけたら、すぐに110番。

「じゃあ、これはどう？落とすものをハンカチじゃなくてあんぱんにかえる」

「なにそれ？まさか餌付け？餌付けなのか！？」

「まずは、懐かせないとね。あとは俺の腕の見せ所だな」

「やめるバカ！純白な春野さんを汚すな！」

「俺色に染め上げてやるのも、面白いかなあとと思って」

「面白くねーよ！」

もちろん却下。

餌付けしたいなら、そこら辺の野良猫にしときなさい。いや、訂正。逆に、猫型ロボットに躑けてもらいなさい。以上。

3人目、早乙女の意見。一番女慣れしているこいつなら、とほんのちよつとでも期待したことをこのあとすぐに後悔することになる。

「まどろっこしいことは嫌いだ、シンプルに行けばいい」

「まあ、そうかしんねえけど」

「押し倒せ」

「シンプルすぎだろーが！俺はどれだけ欲求不満なんだよ！」

論外。

滝にうたれて修行でもしてくれば？そのまま二度と戻ってこなくていい。訂正の必要性は皆無。以上、終了。

強制的に作戦会議の幕を下ろして、ぐったりと椅子に座って背中を背もたれに預けた。彼女の姿は、もう見えなくなっていた。
俺の恋は、どうやら前途多難みたいです神様。

5・はちみつびより

「ちよいとそのお嬢さん、俺にナンパされてみませんか？」

目の前に現れたのは、ハニーフェイスの王子様。壁に背中を預けてニヤリと笑うその姿はとても様になっている。この王子様のお名前はなんだった？隣を歩いていた友達が興奮した口調でわたしの肩をゆさゆさと揺らしはじめる。「ちよ、ちよつと春野！野上くん知り合いだったの？」そう、野上くん。坂田くんのお友達のひとり確か、見た目の通り“王子様”と呼ばれている男の子だったはず。もちろん、友達調べ。

「今度飲み会やるんですが、メンバーが少なくてさー」

「はあ…」

「あんたも行かないかなーと思ってね、どうっすか？」

「えっ？」

「そこのお友達もいつしよに」

「是非！参加させていただきます！」

王子様の目的は舞踏会のお誘いではなく飲み会のお誘いだった。行く気満々の友達と野上くんがどんどん話を進めていく。置いてきぼりのわたしは買ったばかりのソフトクリームを落とさないように立ち止まるだけ。

「んじゃ、そういうことで。ああ、もちろん坂田も来るから」

「…はあ」

「…あんた、ほんとに分かってんの？」

「え？」

「ぼーっとしてるとあっという間に食われちゃうぜ？」

「食う…？」

「多分そんな度胸はまだでないと思うけどなー？」

「じゃーな」不意に顔を近付けて身体を屈めた野上くんはわたしのソフトクリームをペロリとひと舐めして何事もなかったように歩いていった。さりげなく食べられた。

…食べられるって、こういう意味で言ったの？

「のっ野上くんが舐めたソフトクリーム…」

「え、えっちゃん顔こわいよ？」

「春野！私にこのソフトクリーム売って！」

「売るの！？そして買うの！？」

「買う！そして、野上ファンに高値で売り付ける！」

「無限ループ…？」

野上くん印のソフトクリームは、そのまま行方知らず。まだ一口も食べてなかったんだけどなあ…濃厚ミルクのソフトクリーム。すっかりソフトクリームに浮かれていたわたしの舌のさびしさをどうしてくれよう！ちょっとだけ王子様の人気を恨みつつ、かばんの中に偶然入っていたハチミツ味の飴を舐めた。

坂田くんとはじめての飲み会に、ウキウキな好奇心とほどよい緊張感をひしひしと感じながら歩く単純なわたしの舌は、今度の飲み会へ向けてすでに準備をはじめていたのだった。

その日の夜、はじめて坂田くんにメールを送った。『飲み会楽しみだね』きっかり二分後に受信されたメールには『俺は春野さんと会ったのが楽しみ』…また不意打ちを食らったのだった。なぜだか心臓が落ちて着かなくなつて、返信するのができなかった。

30分後に届いた「おやすみ」のメール。余計に心臓が苦しくなつた。はじめてだ、こんなの。どうしようどうしよう、眠れない。

その夜は、携帯を握り締めたまま眠りについた。

6・かいしんのいちげき

駅でぼんやりと雨上がりの夜空を見上げて、電車が来るまでの時間をつぶす。空を見ただけで簡単に俺の頭を占領するのは、あの子だけ。本当に、重症かもしれない。

「なーにだらしな顔してるんだよー」

突然、カシャリと軽快な音がななめ下から聞こえたと思ったら。ぷぷつ、と笑いをこらえてケータイをこちらに向けている野上がいる。なに撮ってたよと睨み付けると、野上は、いつもの“王子様スマイル”を見せて親指を突き立てた。

「ドジっ子ちゃん、飲み会に誘つといたから」

「…は？」

「ばっちり、オッケーもらってきたよー」

「ま、まじで？」

「マジっすー」

「のっ野上様ああ！」

嬉しさのあまり、野上に抱きついた。周りの視線が痛い、そんなこと気にならないくらい俺の恋愛運は右肩上がりである。グッジョブ、野上！もつべきものはやっぱり友達だ！

スッ、と野上が手のひらを広げて俺の前に突き出した。迷わず握手してみたら、ものすごい力で腕を捻られた。その細い腕のどこにそ

んな力があんだよ!?

「一万円」

「はあ!？」

「報酬額、一万円」

「……」

金で愛を買うつつもりはないが、今回は仕方ない。毎度ありーと無表情で小首を傾げるDSの企み通りになっているのが、腹立つ。次、覚えとけよ。

「ヘタレがただけ攻めていくのか、楽しみにしてるんで。まっ、精々頑張れば？」

「うつせえ!言われんでも、頑張るわ!」

「えっ…押し倒すの?うつわ…」

「やらねーよ!…っかできるわけねーだろ!」

「いや、坂田なら酔った勢いでやりかねないと思って」

「ただけ信用ないんだよ俺!…酒の力になんか頼ってたまるか」

「どうだか」

「お前こそ飲み会のノリで春野さんに変なことすんなよ!」

「ん?変なこととは?具体的に言ってよ」

しつこくからかってくる野上の頭をパン!と思い切り叩いて黙らせておく。ついでもう余計なことを言わないように、さっき買っておいたカレーパンを野上の口の中に詰め込んでおいた。

「ふおはたー。ふえーるきへる」

「は？なんだよ」

「ふえーるほ、ひふへーはひふへほ」

「……お前、わざとやってんだろ」

「んぐ。だーからー、メール。メール来てるって」

「あ？」

カレーパンの食べかすをつけたままの野上が指差すのは俺の震えているポケット。汚れた口を俺の上着で拭おうとしている野上を阻止しつつ、ケータイを開く。確認画面を見た瞬間、思考が停止した。やばい、今俺絶対気持ちワリイ顔してる。春野さんからののはじめてのメール。どうしたって、顔がふにやふにやになる。

「坂田、電車来たぞー？」

「お、おう……」

「ん？なんかお前顔赤くね？」

「あっああっ赤くねーちょー！」

「“ちょ”って？何々？そんな焦って噛んじゃうくらい恥ずかしいメールが……」

「ちつちげーよ！ばっ、おまつ、見るな！」

野上から奪い取ったケータイに、思わず頬擦りかチューをしてしまいそんな気持ちを押さえ切れず、その場でくるりと一回転。まさかの会心の一撃を食らった俺は、ニヤニヤした口元を隠さずに電車に乗り込んだ。

「坂田顔きもーい」

「うつせー…」

今なら大声で、恋の歌でもなんでも歌えそうな気がした。
まさに“恋しちゃったんだ”状態なんですけど！

6 かいしんのいちげき(後書き)

恋しちゃったんだるるる。っていうフレーズをよく口ずさんで
します。

7・やわらかいきば

朝からボリユームのあるチーズバーガーを買った。女子としてあるまじき行動である。しかし！色気より食い気！花より団子！をモットーに今日もわたしは生きているのです！

食欲をそそるいい匂いといっしょに小雨が降る紫陽花通りの道を駆け抜ける。走るたびにパンプスに泥が跳ねる。切りすぎた前髪が生ぬるい風に遊ばれて揺れる。チーズバーガーの匂いが鼻を掠めるたびにあのかっこよくて意地悪な八重歯と色っぽくてどきどきする歯形が頭の中を無意識に占領する。

にやける口元を隠すように前のめりになって走っていたわたしの視界が急にひっくり返った。灰色と青色が混合された空と見つめ合う時間、約2秒間。

「つぶねー…ギリギリセーフ」

息がとまる。状況を把握するための瞬きを三回。力強いなにかに身体を支えられているらしいわたし、無事に地球への着地成功。

…逆さまに映るのは、今の今までわたしの頭の中を占領していたひと、坂田くんだった。「ナイスキャッチ」抑揚のない声の方向には、無表情の王子様。朝からこんなにかっこいい二人組に助けてもらうとは。明日はきつと隕石が落ちてくる、わたし限定で。

「…おはよう坂田くん。それから、ありがとう」

「いや…うん。心臓止まるかと思った…」

「それにしても、見事な転びっぷりだったな」

「慧くんもおはよう」

「…え？」

わたしが野上くん…じゃなかった、慧くんの名前を呼んだ瞬間、坂田くんがぐりんつと顔をこちらに向けて目を見開いた。そんな坂田くんを横目で見た慧くんがニヤンツとほくそ笑んでいるように見えた。どうしたんだろう？

「あー、そっぴや春ちゃん。居酒屋の場所分かりそうすか？」

「うんうん、ばつちりだよ」

「えっ？ちよ、なっ」

「詳しい時間とか決まったらまたメールするんで」

「うん。了解です」

「…どうした、坂田。顔色悪いけど？」

「……春野さん」

「うん？」

「こ、こいつとそんなに仲良かったっけ？」

「え？」

「なーに寝呆けたこと言ってんの。出会ったときから俺と春ちゃんは仲良しこよしだもん。なー？」

にやりと笑う慧くんは無遠慮にがっしりと頭を鷲掴みにされてわしやわしやされる。「春ちゃんの髪の毛柔らかいっすねエ」ニヤニヤと笑っていたずら好きの王子様の視線の先にはなぜか顔面蒼白の坂田くんがいた。本格的に具合が悪くなったのだろうか？

慧くんの腕をなんとかすり抜けて、石像のように動かなくなってしまう坂田くんの顔をそろりと覗き込んでみる。

「だ、大丈夫？」

「はっ、春野さん!!」

「は、はい！」

「えーと…そのー…」

「？」

「…お、俺も“春ちゃん”って…呼んでもいい？」

「へっ…？」

「だ、だめ？」

明るい茶色の瞳がしょんぼりと垂れる。「だめじゃ…ないです」言ったあと顔をあげれば、ぱああつと瞳が見開かれてへらつと笑い返された。その瞬間、心臓がざわざわと落ち着かなくなる。まただ、なんだろうこの感じ。

「春ちゃん」

さっそく呼ばれてしまった名前に、勢いよく返事をする。ピシッと背筋を伸ばして坂田くんを見上げた。…呼ばれ慣れている名前は、ずなのに、坂田くんが言ってくれとすごく新鮮な感じがして、すごく心臓がくすぐつたい。坂田くんの声、魔力がかかっているの？

「その紙袋何入ってんの？なんかいい匂いする」

「チーズバーガー！だよ！」

「へえ！いいなーうまそう」

「えっ、朝から？春ちゃんはやっぽどふつくらな体型になりたいんだなー？」

「ち、ちがうから！そ、そんなじゃないもん！」

「ほーお？」

イタズラっ子を通り越して、いじめっ子な王子様の頭を坂田くんが気持ち良くパーン！と叩いた。きつと慧くんは王子様じゃなくて、毒りんごを売る魔女の方が似合ってる気がします。

「それにしても、なんでチーズバーガーにしたの？春ちゃん少食そうなのに」

「坂田くんの真似したの！」

「へっ？」

「こないだ坂田くんがすごくおいしそうにチーズバーガー食べてるの見て、わたしも食べたくなったから…買っちゃいました！」

それだけの理由で買っちゃうなんて、やっぱりおかしいのかな？坂田くんは、少し放心したあとにバツとわたしから顔を背けて片手で口元を押さえた。慧くんはニタニタ笑ったまま。

「坂田くん？」

「ご、ごめん…今俺の顔見ないで…」

「？…えと、じゃあわたし友達と待ち合わせしてるから…お先に失礼します」

「へーい」

「坂田くんも、またね」

「…ん」

曲がり角でそつと振り返つてみたら、男の子二人が元気よく騒ぎながら歩いてきていたのほつとする。ざわつく心臓を誤魔化すように、調子に乗つてスキップしたらまた転びそうになった。

今日は、なんだかいい事がありそう！

8・りんごばくだん

俺が知らない間に、野上と春野さんが仲良くなっていた。

お姫さまに目覚めのキスをしようとしたら、横から現れた魔法使いにかつ攫われた間抜けな白タイツ王子の気分である。いやどちらかと言えば、王子は野上だけれど……いやいやいや、そういう問題じゃない！

すっかり春野さんの姿が見えなくなったところを見計らって、隣でケロリとした余裕顔をしている野上を睨んだ。わざとらしいため息をはかれた。なんだよ、毒舌王子のくせに。

「何を妬いてんのか知らないけど……俺、明日の飲み会の幹事だから。メンバーのアドレスは把握しておかないといけないの。分かります？」

「……納得いかねえ」

「え？なにが？」

「なにもかもだよ！羨ましいこと山のごとしだわ！つーかお前アレ絶対わざとだろ！俺の前で春野さ……春ちゃんにベタベタするのとか今後一切禁止だから！俺が許さねえから！」

すう、と息を吸い込んでから、一気に言葉をまくしたてる。もう一度ため息をついた野上は、俺に毒りんごの形をした爆弾を投入してきたのだった。

「そんなに羨ましかったなら、坂田も触ればよかったのに」

ドッカン、と頭の中で爆発が起きる。湯気が出てるかもしれないくらい真っ赤な自分の顔。毒りんごに侵食されたかも。悔しさや恥ずかしさでゴツチャゴチャになったまま、野上の胸ぐらをひっ掴んだ。

「さ…触れるかあああ！…頭撫でるとか軽々しくできるわけねーだろ！一回触っちゃったら他も触りたくなるし、抑えきかなくなるだろうが！男は狼なんだよ！俺の場合は春ちゃん限定だけだな！」

「まさに、エスオーエスだねー」

「うっせ、ばか！うまくねんだよおお」

がくんと肩を落としてうなだれる。やばい、このままいくと、こいつに毒入りりんごスープを鍋ごと飲まされてしまいそうだ。

「…死ね野上…春ちゃんに名前呼びされやがって」

「はいはい、めんごめんごー」

「お前謝る気ゼロだな！…っか、どうやったら名前で呼びあえる仲まで持っていけんだよ」

「それはまあ…自然な流れでなんとなく」

「なにそのどや顔！すげーム力つくんですけど！」

王子様に化けた魔女は余裕綽々な足取りで歩きながら、コンビニで買ってきた安いアップルパイをがぶりと食べている。…いつか、白いドレスを着たお姫さまも食べてしまっくんじゃないかってくらいの態度に焦るのは、腑抜けの王子様気取りの俺だった。

「野上…」

「なに？」

「お前は、ぜったい春ちゃん好きになっちゃだめだからな！！」

「さーで、それはどうかな？」

「そこははっきりしろよ！」

鬱陶しいと言わんばかりに、口の中にアップルパイをねじ込まれた。ほぼ全部飲み込んでしまった後の無抵抗な相手に、容赦なく爆弾を投下してくるのが野上の悪い癖だ。

「そんなに心配なら、他の男につまみ食いされる前に坂田が先に食っちゃえばいいだけの話だろー？」

「ああ！ナルホドな？そしたら一石二鳥……って、ばかか！！なんでそうなんだよ！」

フルスイングで毒りんごを投げ返し、白馬に跨ろうとしている魔女を蹴り落とすくらいの度胸を見せなければ、愛しのあの子はいつまでたっても振り向いてくれないどころか目を覚ましてもくれないことに気付いた、紫陽花通りの道にて。

「そんな時は、魔法でもかけて手助けしてやるよ。多分ね？」

含み笑いをする憎たらしい魔女に変身していた魔法使いを味方につ

けてしまったらしい俺は、ごくりと最後のりんごを飲み込んだ。

9・あまいしんぞう

「好きになっちゃった？」

まるでラムネの炭酸が喉の奥でパチパチはじけるみたいな感覚。カラフルなベンチに座る彼が好戦的な瞳で笑いかける。ポケットからいくつかビー玉がこぼれ落ちた。ちがう、溢れだしたんだ。瞬発的にそう思った。「正解です」と隣の彼がくすくすと笑ってわたしの頬に唇を寄せる。びっくりして振り返ると数センチで唇同士がくっついてしまう距離に彼の顔があった。

「目が合ったら、もう手遅れってワケ。…意味、わかるよね？」

まったく意味が分かりません、坂田くん！！

挙手して叫んだのはどうやら夢の中のわたしだったようで。現実のわたしは只今飲み会へ向かう電車の中でうたた寝しそうになっていた。ふと、手に触れたポケットの膨らみにギクリとする。まさか、ラムネのビー玉なの！？

「…栗饅頭…」

潰れてかたのくずれた栗饅頭が入っていた…何故に？勿体ないの。でその場でいただくことにする。やさしい甘さにとろけそうになっていたら携帯電話が鳴った。電車はマナーモードが基本なのに！

タイミングよく止まった電車のドアから転びそうになりながら降りる。『もしもし』さっき見た夢と同じ声が耳元でクリアに響くものだから、急いで飲み込もうとしていた栗饅頭が喉に詰まった。

『春ちゃん？おーい？あれっ、電波わりーのか？』

「は、はい！春野です！」

『お、どーもオ。春ちゃん今どのあたり？』

「今？えーと、駅を降りて……あ。」

『どした？』

「…降りる駅…間違えた」

振り向いたときにはもう遅かった。ゆっくりと動き出してしまった電車の窓から、知らない子どもが無邪気な笑顔を見せてわたしに手を振っている。

坂田くんに呆れられてしまう！そう覚悟していたのに、返ってきた言葉はとてもやさしいものだった。

『まじでか。…んー、俺今から迎え行こうか？』

「へえっ！？う、ううん大丈夫！ひとつ早めに降りちゃっただけだし、歩いていけるよ！」

『そー？じゃあさー、春ちゃんがこっち着くまで電話しててもいいー？』

「ほんとに？なんか心強いかも」

『だって、春ちゃん居ないとつまんねーんだもん』

電話の向こう側。居酒屋さん独特の楽しい騒がしさと、かすかに聞

こえてくる聴いたことのない不思議な音楽。それらに負けないくらい直接聞こえる坂田くんの声のせいで耳がこそばゆくなる。なんだかまるで心臓が浮遊しているみたい。ふわふわした気分のまま歩き始める。

坂田くんの声がいつもよりとろんとしていて、男の子にこんなこと思ったら失礼なのかもしれないけれど、かわいいあと笑ってしまった。

「坂田くん、飲んでるの？」

「んー？ちよつとだけ。今から焼き鳥食べんのー」

「そうなんだ、いいなー」

「春ちゃんの声、電話だと少し高めじゃねー？」

「そうかな？」

「うん、なんかかわいいー」

「…！…え！？」

頭のとっぺんから、甘いシロップをぶっかけられたみたい。耳元から届くはちみつボイスは、さっきの電車のこどもよりも無邪気に笑っている。…不意打ちは、やめてほしいのに。

「へへへ春ちゃん照れてるー？」

「坂田くん、酔ってる？」

「酔ってない酔ってない！さっきからずっと飲んでるけど酔ってねーよオ？」

「（酔ってる…）」

「坂田のやつ意外に酒弱いんすよ」

「あれ？慧くん？」

不意打ちの連続、心臓がシロップのせいで溶けてきそうだったのを
食い止めたのは、甘い毒を含んだ王子様の声だった。

目を丸くするわたしに容赦なく、いじめっ子発言をしてくるのは相
変わらずだ。なんだか慧くんとは話した分だけ第一印象とかけ離れ
ていつている気がする。

『よお。駅、間違えたんだって？ どんだけドジっ子発揮すれば気が
済むのかなー？』

「ちょ、ちよつとうつかりしてたただもん」

『はいはい。のろまはのろまなりに早く歩いて来てくださーい』

「（い、いじめっ子リターンズ…！）」

『早く来ないと坂田が他の女にテイクアウトされちまうぜ？』

「へ？ テイク…？」

『あ、ごつめーん。テイクアウトされんのはもしかしたら春ちゃん
のほうかも、』

『ちよつ、おまつ、なーに余計なこと言ってたんだよ！ ばーかつ！ 野
上のばーかつ！』

『…まあ、坂田がすでにこんな感じなんでお早めに。』

「うんうん、頑張つて歩くね？」

『えー？ 春ちゃんなんで笑ってたんのー？』

「ん？ なんでもないよ」

いつもと雰囲気が違う坂田くんの声、ずっと聞いていたい。締まり
のない顔で、さっきからずっと笑っていることに気が付いた。
声だけでこんな状態なのに、目を合わせて話したらどうなっ
てしま
うんだろう。

「あつ、看板見えてきたよ」

「んー？着いた？」

「うん！…坂田くんたちもしかして窓際の座敷に座ってたりする？」

「そうそう。すっげーなんでわかんのか？春ちゃん天才？」

「あはは、だってここから見えるだ…もん…」

「春ちゃん？」

窓越しに見えたキヤラメル色がゆっくりと顔を上げて携帯を手に持ったまま突っ立っているわたしのほうを見た。「春ちゃん、見つけ」へらつと笑いながら手を振ってくれているのに、なぜか動けない。…目が離せなくなる。心臓がトロリと溶けだした。夢の中の彼の声が、視線が、もうずっと絡まって解けなくなっているの。どうして？

“目が合ったら、もう手遅れってワケ。”

それは、吸い込まれたらおしまいということ？夢と現実とは、こんなにも違う。逸らしたいとも思うのに、その気持ちよりずっと強い想いがある。

“…意味、わかるよね？”

反芻される、夢の中の坂田くんの声がわたしを突き動かした。…ぱ

ちんとラムネの炭酸が弾けた。ビー玉が転がる、足が動く、甘い心臓が合図をくれた。

“好きになっちゃった？”

そう、つまりはそういうことなのだ。

甘い心臓にフォークがぶすりと刺さったような気がした。

9・あまいしんぞう（後書き）

気付いたときにはすでに“手遅れ”なのよって、誰かが言っていた。

10・いただきます（前書き）

お腹が減ったら、戦も恋も、できないみたいですよ。

10・いただきます

はじめて目を合わせた瞬間から、もしかしたらわたしはもうすでにあなたに“落ちていた”のかもしれないね。

世界がスローモーションに動いた。これが世間で言う“恋に落ちた”瞬間なのだろうか。情けないことに二十歳にもなってやっと気付く、恋という感情。やっと女の子としてのスタートラインに立てたような気がする。

わたしが走りだそうとするずっと先の道で、おしゃれでかわいくて物知りで尚且つ恋の駆け引きが上手な女の子たちが勝気な表情を見せて手を振っている。そんなに急ぐ必要がどこにある？

“ばかねー！恋愛は奪い合いなのよ！弱肉強食なの！ポケッとしてたらあつという間に置いてかれるんだから！”

いつか経験豊富な友達がビール片手に力説していたことを思い出す。わたしはひとり拳をぎゅうつと握りしめた。たっつくさんいる恋のライバルとやらへの闘争心を新たに秘めて。ほどけた靴ひもに足を挟まれてすっ転んだって、顔面泥だらけになったって、鼻血垂らしながらも彼のところまで走っていききたいと思うから。

『春ちゃん？』

ヨードン！の合図で走ろうとしたら、いきなりの声援のせいで出遅れてしまった。振り返れば、手を振って笑っている坂田くんの姿。自覚したとたん、更にキラキラして見えるから驚き。妖精さんの魔法の粉を全身に纏っているみたい。耳元で唱えられた魔法の呪文みたいな囁きに、パチンと目が覚めた。

『春ちゃん？店、入らねーの？』

「え！？え、えっと…」

『どっか具合でもわりーの？』

「…さ、坂田くん」

『んー？なーに？』

「わたし近くにあるコンビニに寄ってから行くね」

『え？』

「ダッシュで行ってくる」

『ちよっ、春ちゃん』

「気合い入れてくる！」

『まっ、』

窓越しで携帯を耳に当てたまま慌てて立ち上がった坂田くんにぺこりと頭を下げて、横断歩道を渡ってすぐのところにあるコンビニに向かう。右も左もわからない恋の行方。困ったときはとりあえず甘いものを食べる！これ鉄則なり！

今日は少しだけ奮発して、生クリームあんぱんを購入。

目と鼻の先に坂田くんたちのいる居酒屋さんがある。坂田くんにはすぐに戻るとその場のハイテンションで言ってしまったけれど、この生クリームあんぱんを食べて気合いを入れて心臓のざわざわが落ち着いたら合流することにしよう。

近くにあつたミルク色をしたベンチに座って、一口目をがぶり。生クリームとあんこの甘さがちょうどよくとても美味でございます！口をモグモグさせながら見上げたお空の色は紺色に近い夜空。一番星はどこに隠れているんだろう。

「春ちゃん、こんなところで何してんの？」

急に映りこんだのは、まぬけ面のわたしを見下げる整ったお顔。少し頬が赤いのはお酒を飲んでいた証拠だ。

驚きのあまり両手でぎゅうっと握りつぶしてしまった生クリームあんぱんからは中身がぶにゅうっと溢れてしまった。あ、靴ひもがほどけたまんまだ。このままだと、頭から転んでから回る可能性大。もちろん靴ひもを結びなおすひまもない。わたしが慌てている間に坂田くんは、「すぐ戻るって言ったのに、ウソついたー」と、口を尖らせながら自然な動作で隣に座ってわたしの泳ぐ瞳を覗き込んでくる。

「探しにきてくれたの？」

「んー…だって、春ちゃんが俺の目の前にいたのにいなくなるしーそんなん生殺しじゃんとか思ってたさー」

「え？」

「もう俺の目の前から消えたらだめだかな！もし消えたらつねるからっ！わかつたー！？」

「は、はい」

「うん。よしよし〜」

にこにこ笑いながら両手でわたしの頭をぐしゃぐしゃに撫で回してくる坂田くんは、わたしから見ても酔っぱらいさんなのが分かる。酔うと坂田くんはかわいらしくなるんだなあ。また貴重なものを見ることができた。

手はあんぱんのせいでふさがっているので抵抗することもできずされるがままの状態。満足したのか坂田くんがにしゃっと笑って手を止めた。

「春ちゃん、かわいい」

「あ、ありがとうございます…」

「へへ〜」

ふにやっと笑う坂田くんにつられてふにやっとなるわたしの心臓。かわいいのは坂田くんだよ。

「…食べたくなるくらいかわいい」

「食べ…?」

「へへ〜」

「じゃあ、食べる?」

「…え?」

もしかして、お腹が空いているのかもしれない。なんとなくそう思

って、首を傾げる坂田くんの口元に遠慮がちにあんぱんをもっている。ゆつくりと坂田くんがわたしを見上げた。

「…うん、食べる」

「じゃあ、はい。一口どうぞー」

「…いただきます」

あんぱんを持っているほうの手首をぐっと掴まれたまま、坂田くんの顔が近づく。目と目が一瞬だけ合う。そして、噛み付くようにして食べられたのだ。

…生クリームあんぱんじゃなくて、唇を。

11. じちそつちま（前書き）

P G 1 2 要素があります。

11. ごちそうさま

「いただきます」

彼は確かにこう言ったのだ、とても律儀に。

食べたい発言の直後、まさかその対象があんぱんじゃなくてひとの唇だなんて予想もつかなかった。もしくはわたしの唇があんぱんに見えたのかもしれない……いやいやいや、それはない。そう考えている間にも坂田くんの唇は離れない。ときどきうつすらと目を開けてわたしの混乱っぷりを観察している。

かち合った瞳の奥、鋭い何かがギラリと光ったような気がした。

「……む！」

「……春ちゃん」

「んー！」

「もうちょつとだけ、食べてもいい？」

キスなんてもちろん生まれてはじめてで、恥ずかしいことに二十歳にもなつてキスの仕方也不知道なんです。息つてどこですればいいの？止めていればいいの？目つて閉じなくちゃいけないの？この行為に、終わりはあるの？

分らないからまばたきをすることしかできないわたしの肩をぐつと引き寄せて、更に苦しくなるキスに目眩さえ覚えた。

「ん、んっ」

「春ちゃん」

「さ、かたくつ、くるし、」

「口、少し開けよっか？ね？」

「やつ、」

「あーんして？」

がぶり。また食べられるわたしの唇。その内、身体ごと全部坂田くんにぺろりと食べられてしまうんじゃないだろうか。心臓がざわりと騒ぎだす。口内にぬるりとしてきた生ぬるい触感にぎゅっと目を閉じた、その時。

「はい、猛獣捕獲」

やけに落ち着いた間の抜けた声。

ちゅっ。恥ずかしい音を立ててから、坂田くんの顔がずりりとわたしの胸に沈んだ。その頭の上にはたくましい肘が乗っている。涙目で見上げると呑気に焼き鳥の串を口にくわえてピースサインを見せつけてくる慧くんがいた。

「大丈夫すか？」

「え？…うん」

「あっそう」

「…焼き鳥いいなあ」

「春ちゃんの分は俺が責任持って全部食っというてやったから」

「…ひどいよ…」

「…」

「……」
「……だから、あの時も忠告しといてやったのに」
「え？」
「……ぼーっとしてるとあっという間に食われちまうぜ？」……ってな」
「……そうだったっけ」
「あーあ。だめだこりゃ」

すぐ近くにいる慧くんのため息がどこか遠くのほうで聞こえる。頭が真っ白けのまま、ふらりと立ち上がったわたしの手を慧くんが掴んだ。

「春ちゃんどこ行くんすか」
「帰る……」
「そっち駅と逆方向だよー？」
「うん」
「ひとりで帰れる？」
「うん」
「おーい」
「うん……あ、慧くん」
「なに？」
「あんぱんあげる」
「そんな潰れた物体、いりません」
「そっか、残念……」

パツと慧くんが手を離れた。わたしは潰れた物体をぼんやりと見つめたまま、動けない。走る足は、どこにいった？

「春ちゃん」

「ん？」

「坂田はこっちで預かるから。…気を付けて帰りなよ？」

「うん…」

白目を向いたまま気絶している坂田くんをずるずる引き摺りながら爽やかに歩いていく慧くんの背中にぼんやりと手を振った。ぼんやりしてたら電柱に頭をぶつけた。痛い。手鏡に映った自分の顔はかつてないほどまぬけで情けない顔をしていた。赤い。

11. ごちそうさま（後書き）

おまけの野上くん

その後。

「もしもし、あつ、早乙女？ああ、うん、見つけたよー。うん？何してたって？空腹のオオカミがのろまなドジっ子ちゃんに盛ってました。んじゃ、今から連れていくから」

野上くんは二人に電話をしてみても繋がらなかったから、探しにきたみたいな感じです。

12・おとこのこだもん（前書き）

あいすべきばかり、パートツ。

12・おとこのこだもん

誰か嘘だと言ってくれ。

「嘘じゃないよー」

「お前な、いくらなんでも攻めすぎだろ」

「しかも酔った勢いで襲うなんてサイテーよ！女の敵だわ！」

「うっ嘘だアアア！！…って、佐々木うつぜえんだけど！なんでおねえ口調！？なんで裏声！？」

悪夢のような飲み会から一夜明けた。朝が来ても来なくても、状況はまったく変わらなかった。ただのオオカミ野郎の俺がひとり自宅に潜り込んで現実逃避しているにも関わらず、図々しく上がり込んできた野上たちの容赦ない攻撃のおかげで傷口はさらに悪化。もう手の施しようがない。

さようなら俺のピュアハート、さようなら俺の恋。恋の神様は、きっともう俺に微笑んでくれない。むしろ嘲笑っている気がする。

「ああー！もうだめだー…嫌われた…」

「自業自得ですね」

「坂田は酒飲むと色んな意味でオープンになっちゃうからねー」

「俺は絶対ヤツちまうと思ってたけどな」

「ヤツてねー！キスしたただけだ！」

「“だけ”？」

「いや…すいません…そういうことじゃねえよな…うん…」

三人から冷たい視線を浴びせられる。凍り付けにされたガラスのハートに、ガンガンと釘が打たれてヒビが入っていく。応急措置も、やる気がおきない。

「どうしよう俺！ーマジ調子に乗りすぎた！いくらなんでもやりすぎた！」

「そういえば、春ちゃんいつにも増してぼんやりしてたなー…よっぽど衝撃がでかかったんだろうなー…あーあーかわいそうにー」

「…………死にてえ」

そりや確かに？お酒の力は少しかり借りましたよ？普段なら絶対軽々しくできないお触りとかもやっていましたよ？そこは認めます。でも、それ以上のことなんて望んでいなかった！いや、あわよくば望んでいたのかもしれない。俺だって健全な男の子です！下心はいつでも控えていますから。いつでもどこでも準備万端ですから。

『じゃあ、食べる？』

あんなこと、好きな女の子に笑いかけながら言われてみる。喜んで！ってなっちまうだろ。明らかにあんぱん食べる？の意味だったけど、俺にとっちゃ、わたしを食べて！ぐらいの破壊力があつた。つまりは、

「欲情した…」

「うつわ、この人開き直っちゃったよ…」

「すんなよ、せめて室内で欲情しろ」

「きゃー！不潔よ不潔！女の敵だわー！」

「人目もはばからず、ぶちゅぶちゅしてる坂田見て俺は心底軽蔑したけどね」

「あー！ー！うつさいうつさい！」

再び布団に潜り込んだみのむし状態の俺の上にどっしりと肘を乗せた早乙女が、珍しく真面目な声を出した。この声で、一体何人の女を誑かしてきたんだか。

「…で、どうすんだよ」

「…なにが？」

「春野のこと」

「…わっかんね」

「キスをした事実はどうするんですか？謝るんですか？」

「…謝らねえ」

「はあ？」

「謝まっちまつたら、なんかこう、酒の勢いでつい盛っちゃいましたみたいな感じになるだろうが」

「そのまんまじゃん」

「ちっげーよ！そうじゃなくて、俺は春ちゃんだから欲情したんだよ！他の女だったらあんなことしねえ！」

「言い切れるんですか」

「いや…た…多分」

「そこは肯定しろよ」

「絶対だ！絶対！俺は今後春ちゃんにしか欲情しないことを誓います！」

「なにそのいやらしい誓い」

小汚いベッドの上に仁王立ちして、恋の神様に誓いを立ててみたりする。いやらしくてもいやしくなくても、俺は本気だ！そんな気合いに満ち溢れた俺を見上げて、早乙女が意味ありげににやりと笑った。呑気にポッキーを食べていた野上も楽しげに口元を歪ませる。
…え？なにこの空気。

「つーことは、だ」

「告白するってこと？」

「……………えっ」

「なんだその驚いた顔、今の流れだとそういうことだろ？」

「坂田、頑張ってくださいね。フラれても自暴自棄になっちゃだめですよ？」

「そんなときや、俺があのかんちくりんよりもいい女紹介してやるよ」

「じゃあ俺は、慰めの代わりに俺の笑顔をプレゼントしてあげるな？」

俺の両手をわざとらしく握ってきた佐々木を筆頭に、次々とマイナスな方向に話を進めていく早乙女と野上にひくりと口元が動いた。正常に戻りつつあった傷だらけのハートに、また絆創膏を貼る事を覚悟して思い切って聞いてみる。

「ちょ、ちょっと待て。なんでお前ら俺がフラれること前提で話進

めてんの？」

「フラれるだろ？」

「フラれるでしょ」

「フラれますね」

「こんな時だけ、きれいにハモツてんじゃねーよ！まだわかんねー
だろうが！希望くらい持たせろ！」

他人事だと思つて好き勝手に騒ぐ外野に舌打ちをし、気付かれない
ように思い出すのは、あのときの彼女の柔らかい唇の触感とぬくも
り。また食べてしまいたくなる衝動を下心だだ漏れの口元で隠す。
しょうがないだろ？だって俺は男の子ですから。

13・こいのびょうき

長いお昼寝から目覚めた蝉とかんかん照りつける太陽が、これでもか！つてくらいに自己主張をはじめ7月。

天才でも馬鹿でもない中途半端な脳みそのわたし、只今ある病と格闘中であります。お腹はいつになっても満腹でコンビニのツナマヨおにぎりさえも食べる気になれない。頭がぼーっとして心臓が情緒不安定。身体中がお風呂上がりの体温よりも高くて熱い。

お母さんは、“知恵熱”だと言った。だけど、本当の病名はきっと、“恋患い”に違いない。

だつてずっと、坂田くんの顔が頭の中から消えてくれない。

「お大事にね」

飲み会の日から一夜明けても下がらない熱。お見舞いに来てくれたえっちゃんも帰ってしまったし、一日中ベッドと仲良く寄り添っているのにも飽きてきた。冷蔵庫にあるシュークリーム、食べたい。でも相変わらずお腹はいっぱい。恋の病というものは、どうやらとても厄介なものみたいです。

『ヤッホー。熱あるんだって？大丈夫すか』

そんな時に、なんの予告もなしに受信されたいじめっ子王子様から

の画像つきメールを見て、ゲホツとむせこんでしまった。貼り付けられていた画像には、まぬけな寝顔を晒しているわたしがでかでかと写っていたからだ。流出されたら困る！と焦りながら、慌てて慧くんに電話をかけた。

「画像消してください…！」

『春ちゃん、声ガラガラ〜』

「がっ画像…」

『はいはい消します消します…多分ねー』

「多分!？」

『あの写メ、春ちゃんのお友達が送ってくれたんだよー』

「まつまさか…えっちゃんの仕事…？」

『そうそう、えっちゃん。あの子おもしろいよなー』

「ふたりともひどいよ…」

仮にも病人のわたしの泣きそうな声を聞いても、平然とした態度のままゲラゲラと楽しそうに笑う電話の向こう側から誰かが咳こむ声が聞こえた。キョトンとして、慧くんに聞いてみる。

「誰か風邪引いてるの？」

『んー？まあ…ある意味？』

「どういう意味？」

『案外、春ちゃんと同じ症状だったりしてな？』

「わたしと？……お大事につて、その人に伝えておいて下さい」

「オッケー」

名前も顔も知らないそのひとに親近感を覚えながら、あれ？と首を傾げる。慧くんはわたしの病名を知っていた？電話越しから慧くんがそつと耳打ちしてきたことばに、氷枕がじゅわつと溶けてしまうくらい顔が熱くなった。

『坂田のこと考えすぎて、熱でも出しちゃった？』

「慧くん…エスパー…？」

『やべ、当たっちゃった』

「勘！？」

『春ちゃん、かわいいっすね』

「も、もう切ってもいいですか…」

『で？考えはなんとなくまとまったんだ？』

エスパー慧くんが、全部お見通しだよって、水晶でわたしの頭の中を見ているみたいに笑った。王子様は、魔法使いに弟子入りでもしたのかな？やさしい魔法にかけられた気分になる。

「あのね」

『ん？』

「食べられてもいいかもって、思ったんだ」

『大胆だね』

「それくらい、大好きなんだなっつと考えてたの」

『いやいや、俺で告白の練習されても困るんですが』

「い、いじわるだなあ…」

走り出したばかりのわたしの手を掴んで、一緒に走ろう？とやわら

かい牙を見せて笑ってくれた坂田くんの意図なんてずっと考えてもわかるわけがなかった。

でも、わたしの気持ちは変わらなかったから。だから、坂田くんのところまで走っていくって決めたんだ。王子様は杖をくるくると回しながら「精々頑張つて？」と、りんごを噛む音を残して、呪文を唱えてくれた。

『お見舞いには行けないけど、代わりにイイモノあげる』

「イイモノ？」

『そんじゃ、お大事に』

五分後に送られてきた毒りんごよりも威力のありすぎる王子様からの贈り物のせいで、わたしの熱がぶり返したのは言うまでもない。

“知恵熱出したバカがここにももう一人”

坂田くんの寝顔の画像付きメールは、どんな強力な魔法よりも効果がありました。

14・ちちんぷいぷい

恋の神様が俺に天罰を下したらしい。この年で恋の悩みすぎで知恵熱出しちゃうとか、勘弁してくださいカミサマ。しっかりしろよ俺。看病しにきたのか悪化させにきたのか分からない野上たちのせいで、なかなか寝付けない。…確実に後者だろうけどな。

「坂田、ハイツアーン」

「熱ッ！おまつ、火傷させる気が野上！」

「俺に触れたら火傷するぜーハイハイ」

「ハイハイじゃね…あつつい！マジで熱い！しかもなんか甘い！？」

「わりい。塩と砂糖間違えたみたいだ」

「おいっ！誰だよ料理オンチの早乙女にお粥作らせたの！くそ甘いんだけど！」

「それなら、醤油とマーマレードジャムを混ぜてみたらどうでしょう？コクが出るんじゃないですか？」

「やめろばか！味覚オンチは引っ込んでろ！」

無理矢理熱々のお粥を食わせようとする野上、作る姿だけは一丁前の料理オンチ早乙女、砂糖粥に醤油とマーマレードジャムをぶっかけている味覚バカ佐々木。オレハイトモダチヲモテシアワセダナア。気持ちのこもった棒読みでお送りしております。乾いた笑いをする病人の俺の顎をがっつと掴むのは、真剣にスプーンを持つ佐々木である。いい加減にしろ、俺は男にアーンなんてしてほしくねえんだよ！

「坂田、早くその純粋な乙女の唇を貪りつくした汚らしい口を開けなさい」

「おいやめるその言い方」

「あながち間違っではないけどな」

……言い返せないのが悔しいですカミサマ。

流し込まれたお粥は甘いんだか辛いんだかしよっぱいんだかよく分からない不思議な味がした。つまり不味かった。

「坂田、おかわりもあるぞ」

「謹んでお断わりさせていただきます」

「てめえ、俺が作ったメシをまさか残すとか言わねえよなあ？」

「断る」

「佐々木、鍋ごと持ってこい」

「お安い御用です」

ある意味毒りんごスープよりも強烈なものを鍋ごと飲ませられるとは思わなかった。ゲホゴホと咳き込む俺を尻目に、呑気にケータイで話しこむ野上の背中に佐々木が持つてきたりんごを腹いせに投げつける。ぱし、といとも簡単にかっこよくキャッチした野上はにたりと意地の悪い笑みを俺に一瞬向けてから、がぶりとりんごに噛り付いた。こいつ、弱点なしか！？

「お見舞いには行けないけど、代わりにイイモノあげる」

やけにやさしい声色でケータイ越しに囁いたあと、野上は俺にケータイをビシッと向けて腹黒い爽やかな笑顔を見せた。反射的に後ずさる俺。

「ハイ、送信」

「は？」

「イイモノ」

「はああ？」

ピロリンと俺のケータイのメール着信音が鳴った。しかも画像付きである。なにこれ超怖いんですけど！野上を見てもにっこりと微笑んでいるだけ。覚悟を決めて、メールを開いてみる。数秒間ケータイの画面と見つめあった後、グングンと上がっていくのは俺の体温。シャリシャリとりんごを噛る野上の能天気面をグワツと見上げるとニヤンと笑われた。この確信犯め。

「……野上」

「な？イイモノだろー？」

「おっお前エエ！いつ春ちゃん寝顔撮りやがった！ふざけん…な……」

ベッドから立ち上がって野上の胸ぐらを掴んで叫んだあと、ふらりと後ろに倒れていく俺の身体。やつぱりこいつら、俺の熱悪化させにきただけじゃねえか。野上が口パクで「お大事に」と言ったのを見たのを最後に、俺は意識を手放した。

「あ、坂田が倒れた。…この写メ、そんなに刺激が強かったの？ プ
ブツ、ゴメンネー」

「こいつ、熱上がってねーか？」

「本当ですね。野上、坂田に何を見せたんです？」

「んー？ちよつと魔法をね？かけてあげただけだよ」

不意打ちの、春ちゃんの無防備な寝顔ショットにノックアウトされ
た俺の間抜け面を野上がちやっかりとケータイで撮って、あの子に
送信したのを知るのはもう少し先の話。

オレハイトモダチヲモテシアワセダナア。

15・きみのところまで

恋する女の子は無敵なのである！

朝の4時に目が覚めてカーテンを開けた。完全復活！眠気を含んだやわらかい朝の空気を吸い込んで真っ先に思ったことが、ひとつ。

坂田くんに会いたい。

簡単なことなのだ、なにも難しく考える必要はない。全部話してしまえばいい。わたしの気持ちも今考えていることも、なにかもそのまんま包み隠さずに伝えればいいだけ。分からないことは聞けばいい。この間のキスのことも、坂田くんが今何を考えているのかもそのまんま包み隠さずに教えてもらえばいいだけ。

とにかく立ち止まっていたって始まりもおわりも何も見ることができないと思うから、だから、わたしは走ります！

真っ黒なりボンが目立つカンカン帽、最近お気に入りのマリンワンピース、背中には真っ赤なハートマークが描かれたリュックを背負い、ショッキングピンクのスニーカーで向かう先は、恋の道一直線！わき目もふらず走っていたらなにかの障害物に体当たりしてしまった。

「だ、大丈夫ですか？」

すっ転びそうだったわたしの二の腕を掴んで助けてくれたスーパーヒーローさんの顔を覗く。さらりと靡く黒髪美人の男の子が「春野さん？」と、わたしの名前を思い出したかのように呼んだ。それから何故か顔を真っ赤にして慌てて謝られた。

「気やすく女の子の二の腕を掴んでしまいました…！申し訳ございません！」

「へ？」

「…とか言いつつ、顔がにやけてんだよ。お前やっぱむつつりだろ」「俺も一応健全な男子なんですから仕方がないでしょう？」

「まったく、春ちゃんは何ですすぐ顔面から転ぼうとすんのかなあ」

「慧くん！」

「よう。熱はどうすか」

「うん！絶対調だよ！」

「それはよかったですね」

眼鏡をかけた男の子、佐々木くんがににこと相槌を打ってくれた。そういえば、佐々木くん達と話すのははじめてかもしれない。慌ててぺこりと頭を下げる。

「あ！どうも！はじめまして？…は、ちょっと違う気がするね」

「こうやって面と向かって春野さんと話すのははじめてですからね」

「ふーん…やっぱちんちくりんじゃねえか。これのどこがいいんだ」

か」

かつこいいオーラがムンムンの男の子たちに囲まれて萎縮してしま
う。色っぽい雰囲気の子、早乙女さんに頭をがしりと掴まれて
ぐらぐらと左右に揺れる身体。かぶっていたカンカン帽はいつの間
にか慧くんに奪われていた。…そういうば、坂田くんが見当たらな
い。帽子が似合いすぎている慧くんの服をちよいちよいと引っ張っ
た。

「慧くん、坂田くんは？今日来てないの？」

「ん？知りたいんすか？なんで？」

「なんで…って？」

慧くんは知っているはずなのにわざと聞いてこようとするから、ち
よつと睨むといじわるな笑顔を向けられた。早乙女くんがぐつと顔
を近づけてくるから、緊張で足が震える。よく見ると目が笑ってい
た…あれ？このひともわざと？

「普通は会ったの気まずいんじゃないのか？」

「え？」

「坂田に無理矢理キスされたんでしょう、平気なのですか？」

「それともキスなんてし慣れてるからなんとも思わねえか？」

早乙女くんの仰天な一言に驚きすぎて硬直してしまう。そんなわた
しの肩に手を置いて冷静沈着に話しはじめたのは慧くんだった。

「早乙女、なに言ってるの。こんなちんちくりんに限って経験豊富
なわけないって。アリエナイアリエナイ」

「ちんちくりんと見せかけて…、かもしれねえぞ」

「いや、百パーないって。だってちんちくりんだし」

「ちんちくりん…」

「春野さん、俺はちんちくりんなんて思っていますよ？小さくて
可愛いと思うているだけですからね」

「佐々木、それフォローになってないから」

「ちんちくりん…」

「つーか、坂田ならあそこにいるぜ。ベンチのどこ」

「ちんちく……えっ？」

早乙女さんの指差す方向には、大学内に設置されているおしゃれな
デザインのベンチに堂々と仰向けになって寝転がっている坂田くん
……と、露出度の高いお洋服を着こなすギャルの子が数人いた。
ぷしゅう、と気合いが入っていた心臓がしばらく気がした。

「春ちゃん？どうした？」

「気合いが足りなかったのかも…」

「坂田に平手打ちする気合い？」

「え！？ち、違うよ？」

「なーんだ、つまんねえの〜」

「…坂田くんモテモテなんだねえ」

「坂田はそれどころじゃないと思うけどなー？」

「え？」

「行ってこいよ、坂田んどこ。話があるんだろ？」

「早乙女、なにかっこつけてるんですか？　なんだか気持ち悪いですね……」

「ああ！？」

遠巻きに坂田くんを見る。うーとかあーとか唸りながら顔を両手で覆っていて、その腕に触れる手入れされたネイルの指先に心臓がちくりと痛くなった。なんだか泣きそうになって俯いた視線の先には動けない両足が映る。絆創膏はないはずなのに、情けないなま足。不意に暗くなつた視界、イタズラ好きの王子様に奪われたはずの力ンカン帽が深くかぶせられていた。

「何の気合いか知らないけど、俺はあのギャルたちより春ちゃんのほうが好きだよ？」

「え？　あ、ありが……」

「からかい甲斐があるって意味で」

「……ありがとうと言いにくい褒めことば？　だね」

「坂田、呼んできましようか？」

「大丈夫！　ありがとう佐々木くん」

「いえいえ」

「春ちゃん、どこ行くのー」

「もう一回気合い入れ直してくる！　すぐに戻るよ！」

まだ芽生えたばかりの恋心を抱え直して歩きだすわたしの両足。気合い注入のためのあんぱんをふたつ購入して両手に抱えて向かう先は、恋の登竜門！

16. はしっていくよ

「好きです」

夢みたいな夢を見た。頭におおきなりボンをぴよこんとつけている女の子が、パンパンに膨れ上がったリュックの中からカラフルなキヤンデイを取り出して俺の手に握らせた。そして、彼女は俺の胸に飛び込んでふんわりと笑ったのだ。

「なくならないからたくさん食べていいよ」

そんな甘い誘惑のことばを緩やかに乗せながら。

「坂田く、ねえねえ今から遊び行こーよお」

「…行かない」

「なんでえ？」

「ダルいから」

「えー？じゃあ今日飲みに行こうよ」

「しつけーな…酒は当分飲まないことに決めたの、俺
「なにそれー」

病み上がりの頭に響く、甲高くて計算されている甘ったるい声に吐

き気がした。つーか、本当に吐きそう。だらんとベンチに寝転がり視界を腕で見えなくする。一瞬、でかいハートマークのリュックが見えたような気がした。

「坂田く？大丈夫？」

「具合悪いの？あたしの膝貸してあげよつか？」

「あつ、いーなー！私も坂田くんに膝枕してあげたいー！」

べたべた、べたべた。無遠慮に触ってくるうざったい手を振り払うことさえ億劫でため息は飲み込んで、目を閉じた。あの子の小さくていつも深爪になりかけている手のひらしかない。膝枕だって、あの子じゃないといやだ。夢の中の女の子が遠くのほうで両手をあげてめちやくちやに笑っている。

俺が欲しくてたまらない彼女はいつだって瞼の奥でいつだって届きそうで届かないところに立っているのだ。…ああ、もう面倒くさい。ごちゃごちゃ考えて逃げまくるのも疲れた。

春ちゃんに会いたい。

開いた視界の先に、ゆらゆら身体を揺らしながら危ない走り方をしている真っ赤なハートマークが描かれたリュックが見えた。…見つけた。

「春ちゃん！」

「えっ？…うわっ、」

「えっ、ちよっ、危な…！」

「……」

「……」

「…あ、ありがとう」

「だ…大丈夫？」

「なんとか」

「…そっか」

間一髪で受け止めた彼女の身体、見上げてくる瞳がへにやりと笑いかける。俺もぎこちなく笑い返す。完全に離れるタイミングを見逃した。…このまま抱きしめられたらいいのに。

「坂田くん」

「はい！？」

「…あんぱん、一緒に食べませんか？」

「……はい」

両手に大切そうに抱えられていたあんぱんのひとつが俺の手に握られる。そして、夢の中と同じように春ちゃんは身長差のある俺を一生懸命に見上げて笑ったのだ。しかも、俺の心臓を撃ち抜く最強のことばを味方につけて。

「…坂田くんに会いたかったです」

やっぱり俺、まだ夢でも見てるんじゃないの？

17・たべられた（前書き）

きみのところまで、はじっていきよ。

17・たべられた

はたしてわたしは、恋の一步目を踏み出すことに成功したのでしょうか？

気合いを満タンに込めた瞳で坂田くんを真正面から見上げてみるけれど、視線はすぐに逸らされてしまった。もしかして、失敗？

「俺も、」

「？」

「俺も、会いたかった」

「え……」

「ずっと、春ちゃんのことばっか考えてた」

ふらふら泳いでいた瞳が急にしつかりとわたしのほうを見つめてくるから、何も言えなくなる。たくさん言いたいことがあったはずなのに、坂田くんの一言で全部どこか遠くに飛ばされてしまったみたい。

しばらく見つめあって、お互いぎこちなく視線を逸らして、また絡まる視線。

「……とりあえず、どうか座ろっか？」

「……うん」

坂田くんの後ろをとことこついていく途中、ギャルの子たちの視線がこわかった。でも、恋のライバルたちには負けたくありませんか

ら、わたしはあなたたちより先を進みますね。休憩していたらあつという間に追い抜かされてしまいそうなもの。

「なにあの子、坂田とりやがつて」

「あたしたちのことは無視かよ」

「もう他の女のモノになる男なんて忘れたほうがいいんじゃない？
ね？」

「のっ野上！…つて、はあ！？なにそれどういう…」

「あーうつせえな。あんなヘタレより、お前らは俺のことだけ見て
ればいいんだよ」

「なっ…！早乙女…」

「真っ赤になっちゃって、かわいいですねえ。さ、今からどこに行
きますか？」

気になって後ろをちらりと見てみると、ギャルの子たちは慧くんた
ちにメロメロになっていた。今の短時間で、何をしたんだろう？魔
法でもかけたのかな？慧くんがこちらを一瞬見て、いつかのように
ピースサインを見せ付けていた。…慧くんは、やっぱり魔法使いだ
つたみたい。

ベンチに座る隣同士、お互い黙ったままあんばんをもぐもぐ食べる。
ちらりと坂田くんを覗き見ると、ぼんやりと前を向いたままさっき
から飲んでいるコーヒー牛乳のストローをかじっていた。

無意識に唇を意識してしまつて慌てて視線を下げる。でもやっぱり
坂田くんの横顔が見たくて顔をそつとあげるわたしは、はたからみ
たらかなり挙動不審だ。

「…あー、なんかさ、」

「うん？」

「照れんね」

「え？」

「さっきの。今思い出したら、すっげえ恥ずかしくなった…」

「わ、わたしは嬉しかったよ！」

「マジで」

「うん！すっごく嬉しかった、です！」

「そ、そうですか」

「う、うん」

また沈黙。恥ずかしさを紛らわすためにあんばんに噛り付く。坂田くんの前で大口つぷりを発揮してしまった…。坂田くんのおんぱんはもう半分しか残っていなかった。歯形にどきまぎするわたし、変態かもしれない。

「春ちゃん」と坂田くんが視線を下にして小さな声でわたしの名前を呼んでくれた。それだけで、たったそれだけで、こんなにも。

「…ご、ごめん。あんまり俺の顔見ないで」

「…？」

「恥ずかしいから…」

「…」

…こんなにも、たくさんの気持ちが一気に溢れてくるなんて知らなかった。こんな想いもぜんぶひっくるめて“好き”というのなら、ああ、やっぱり恋は難しいや、なんて考えるよりも先に走りだした

のはわたしのことはそのものだった。転んでも大丈夫、起き上がる方法はもう知ってるから。

「…春ちゃん？あの、だからあんまじつと見ない…」

「坂田くん」

「え？」

「好きです」

「ごふっ、」

坂田くんが口に含んでいたんであろうコーヒー牛乳を吹き出した。慌てて、持っていたハンカチを渡そうとしたらその手首を掴まれてしまった。強くて熱い手、なんだかわたしの色んなものが吸収されてしまいそう。俯いたままの茶髪が揺れた。つられるように、わたしの心臓も揺れた。

「そんなこと言われたら、俺期待しちゃうんだけど」
「？」

「春ちゃんも俺と同じ気持ちなのかなって、期待してもいい？」

「坂田くん？」

「…春ちゃん」

「は、はい」

「好きです」

心臓に甘いパンチを食らった。そのことばだけで、坂田くんは骨抜きにされてしまいそう。ふにゃふにゃに力が抜けてしまった手を坂

田くんがすっかりと握ってくれた。ああ、これは夢じゃないんですね坂田くん。

「俺、春ちゃんの彼氏になりたい」

「……か!？」

「……だめ？」

「わ、わたしなんかでいいんですか……？」

「うん、春ちゃんじゃなきゃだめなんだ」

「……恋愛もろくにわかんないようなキスも下手くそなわたしでよかつたら、彼女にやって下さい」

「……ぶっ、」

「……わ、笑った」

「ち、ちがうちがう、ごめん。かわいいなーって思ったただけだから」

「……うそだあ」

「うそじゃないって。俺、春ちゃんしかいないもん」

「!」

「キスだって春ちゃんとしかしたくない」

「うっ、」

「信じてくれる？」

なんだか胸がぎゅうぎゅうといっぱいになってしまつて俯いたままのわたしに、ちょっと意地悪く問いかけてくる。……繋がれた手が代わりにわたしの気持ち全部喋ってくればいいのになあ。なけなしの勇気を振り絞ってぎゅっと坂田くんの手を握り返した。

恋の気合いを吸い取られたわたしには何が残っているのかなんて全く分からないけれど、隣で笑ってくれる坂田くんがいる限り無敵になれる気がしたから、不思議だ。緩みっぱなしの顔を全開にして、ふたりして笑う。

今日から、坂田さんと恋人同士になれるんだなあと思ったら落ち着きを取り戻していた心臓がまたざわざわし始めた。せっかく治った熱がまた身体中に集まりはじめる。

「春ちゃん？」

「急に恥ずかしくなってきた…」

「へ？…ほんとだ、顔真っ赤」

「顔があつい…」

「…」

「坂田くん？」

「お、俺もなんか恥ずかしくなってきた」

「伝染しちゃった？」

「伝染しちゃったかも」

ゴール手前で差し伸ばしてくれている手にゆっくりと自分の指を絡める。そして、ふたり一緒に新たに現れたスタート地点に立つ。あなたとなら、寄り道してお昼寝したり大好きなお菓子を食べたりして歩いていくのも悪くないと思うんです。

「ほんと、食べちみたいくらい好き」

柔らかい八重歯を見せて思いきり笑ってくれるあなたとなら。

17・たべられた（後書き）

“好き”って言葉をストレートに伝えるまでのお話が書きたいなあ
と考へて生み出せたのが「レモンの砂糖づけ」です。

お腹いっぱいになるくらいの甘過ぎるしあわせが伝わればいいなあ
と思います。

最後まで、こんな拙い連載を読んで下さったあなた様に「ありがとう
う」という言葉を贈らせて下さい。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3237p/>

レモンの砂糖づけ

2010年12月16日16時34分発行